

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二新橋演舞場B2
電話(五四二)五四七一番

清元協会

港区南青山二の十七の十三の一〇三
電話(四〇二)〇二四〇番

財団法人 古曲会

中央区銀座八の六の三 新橋会館
電話(五七二)〇二一六番

新内協会

品川区旗の台六の二七の二
電話(七八二)三九五五番

常磐津協会

港区南麻布五の三の四十六
電話(四四四)三〇二〇番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四
電話(五四二)六五六四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話(五八五)九九一六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和五十八年三月六日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演

第二部 四時半開演 八時終演

'83 都民芸術フェスティバル

第十三回

邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

'83都民芸術フェスティバル参加公演(昭和57年度東京都助成公演)

	演 目	期 日	会 場	入 場 料 金	問 合 せ 先
オ ペ ラ	「カヴァレリア・ルスティカーナ」「バリアッチ」 (二期会オペラ振興会)	2月22日～24日	東京文化会館	円 8,000～1,500	日本演奏連盟 (437)6837
	「トスカ」(日本オペラ振興会・藤原歌劇団)	2月5日～7日	東京文化会館	8,000～1,500	
	「黄金の国」(東京オペラプロデュース)	1月24日・25日	東京文化会館	7,000～1,500	
	おとぎオペレック「白雪姫」 (東京室内歌劇場)	3月5日	調布グリーン ホー	{ 大人 2,500 子供 1,500	
オー ピ ュ ラ	第14回 都民のためのコンサート	オーケストラ	1月16日～ 3月21日	{ 東京文化会館・ 立川市民会館	1,500～1,000
		室内合奏	1月27日・3月5日	東京文化会館	1,500
		ポピュラー	3月2日	日比谷公会堂	1,500
邦 楽	第13回 邦楽演奏会	3月6日	第一生命ホール	1,500	邦楽連合会 (571)0216
新 劇	「一発逆転」トム・ストップワード原作 小田島雄志訳 (合同公演・原題 ON THE RAZZLE)	2月9日～20日	紀ノ国屋ホール	3,000	新劇団協議会 (341)8151
		2月22日～26日	読売ホール		
児 童 劇	ミュージカル ももたろうの冒険(未来こども劇場)	1月5日～ 3月25日	葛飾区公会堂 ほか6	1,800～1,200	日本児童演劇 劇団協議会 (409)1797
	ないた赤おに・つのぶえのうた他1本(劇団角笛)	2月2日～19日	品川文化会館 ほか5		
	ねぎの里は大きわざ (いちよう座)	2月11日・12日	東京都児童会館		
	青い鳥 (劇団アーク)	2月17日～ 3月30日	ヤクルトホール ほか5		
	真説日本昔噺, さんまのおふだ・ヨーロッパの民話 より, しあわせもののハンス (人形劇団ひとみ座)	2月5日～13日	玉川区民会館 ほか1		
	貧乏神と福の神・八郎物語(劇団かかし座)	3月23日・24日	東京都児童会館		
パ レ エ	白鳥の湖	2月10日・11日	東京文化会館	◎	日本バレエ協会 (462)5524
		2月13日	立川市民会館	4,500～1,500	
現 代 舞 踊	「鳥になつて-マイ ロースト ジェネレーション-」 しらのどべるじゅらっく・マンガラ鉄道の夜	3月10日・11日	東京文化会館	◎ 2,500～1,200	現代舞踊協会 (400)4544
		2月16日～18日	国立劇場	4,000	
日 本 舞 踊	第26回 日本舞踊協会公演	2月16日～18日	国立劇場	4,000	日本舞踊協会 (533)6455
		1月29日	東京文化会館	2,000	
能	都民能	1月29日	東京文化会館	2,000	能楽協会 (574)6441
		2月20日	観世能楽堂	6,000～3,000	
民 俗 芸 能	第14回 東京都民俗芸能大会	3月5日・6日	江東文化 セ ン タ ー	無料招待	東京都民俗芸能大会 実行委員会 (894)6923
客 席 芸 能	第13回 都民寄席	2月13日～ 3月13日	荏原文化センター ほか6	無料招待	都民寄席実行委員会 0423(81)5534

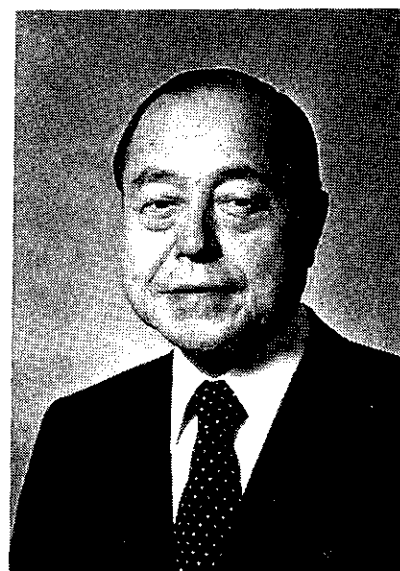
入場券は、都内主要プレイガイドで前売します。

◎印は無料招待あり。くわしくは各問合せ先まで。

フェスティバル全体についてのお問合せは、東京都教育庁社会教育部文化課

TEL (212)5111 (内) 44-531

「邦楽演奏会」によせて



東京都知事 鈴木俊一

「都民芸術フェスティバル」は、昭和四十三年発足以来、本年度で十五回目を迎えました。

このフェスティバルは、東京都が芸術文化団体の行う公演に対して、その費用の一部を補助し、優れた芸術を、安い料金で、多くの都民の方々に鑑賞していただくようと始めたもので、毎年一月から三月にかけて開催してまいりました。公演の種目も当初の六種目から十二種目にまで拡大され、多数の方

方のご努力によって、今では、都民のための一大芸術祭典と呼ばれるまでに発展いたしました。私は、かねてから、この東京を都民のみなさんが心から「わがふるさと」と誇りをもって呼べるまことにしたいと念願し、マイタウン東京構想の実現に努力してまいりました。人やものが激しく流動する大都市東京でこれを実現するには、手がけなければならぬ課題が山積しております。中でも、文化の香り高いまちをつくり、都民のみなさんが心豊かな生活を送ることができるよう芸術文化を振興することは、とりわけ重要な課題です。そのためにも都民芸術フェスティバルをさらに充実させて、多くの都民の方々に優れた舞台芸術に親しんでいただきたいと考えております。本年度のフェスティバルが、都民のみなさんにとって、心に残る楽しい催しになれば幸いです。フェスティバルに参加し、芸術の祭典の一翼を担って下さった邦楽演奏会の力一杯の御活躍を願っております。

第一部番組（十二時半開演）

一、河東節 恋 桜 反 魂 香

同	同	同	同	同	浄瑠璃
山	山	山	山	山	山
彦	彦	彦	彦	彦	彦
晴	科	弥	綾	節	
代	子	津	子	子	
同	同	同	同	三	味
山	山	山	山	線	線
彦	彦	彦	彦	山	山
み	百	さ	順	貞	
な	子	ち	子	子	
子		子			

二、新内節 若 木 仇 名 草（蘭 蝶）

浄瑠璃	富士松	鶴千代
上調子	三味線	新内
富士松	仲三郎	亀明

三、義太夫 天網島時雨炬燵（紙屋内の段）

治兵衛	竹本	土佐廣
小春	竹本	綾之助
三五郎	竹本	幸佳
お末	竹本	素丸
		三味線
		鶴澤
		三生

四、箏 曲 尾 上 の 松

宮城道雄箏手付

同	箏
久保	小橋
茂	幹子
同	三絃
宮城	宮城
数江	喜代子

五、清元筐花手向橘(吉原雀)

淨瑠璃 清元 壽美太夫 三味線 清元 美治郎
同 清元 美壽太夫 同 清元 美多郎
同 清元 幸壽太夫 上調子 清元 国太郎

六、常磐津恩愛 蹟 関 守(宗清)

淨瑠璃 常磐津 文字太夫 三味線 常磐津 菊壽郎
同 常磐津 小文字太夫 同 常磐津 菊助
同 常磐津 八重太夫 上調子 常磐津 啓壽郎
同 常磐津 光勢太夫

七、長唄京鹿子娘道成寺

唄 杵屋 喜三郎 三味線 杵屋 勘五郎
同 杵屋 六美朗 同 杵屋 六蔵
同 杵屋 古之丞 同 杵屋 廣吉
同 杵屋 直吉 同 杵屋 六哲郎
同 杵屋 六七郎 同 杵屋 六九郎

囃子

小笛 望月 長造
同 梅屋 勝六郎
同 梅屋 勝彦
大鼓 梅屋 右太郎
太鼓 梅屋 福三郎

第二部番組（四時半開演）

一、清元忍岡恋曲者（権九郎）

浄瑠璃	清元	登志男太夫	三味線	清元	松之助
同	清元	藤世太夫	同	清元	吉三郎
同	清元	三枝太夫	上調子	清元	静二郎

二、宮菌節桂川恋の柵（おはん）

浄瑠璃	宮菌	千佳	三味線	宮菌	千愛
同	宮菌	千祐三	同	宮菌	千萬
同	宮菌	千有紀			

三、義太夫菅原伝授手習鑑（寺子屋の段）

松	王竹	本素八	三味線	鶴澤寛	八
千代	竹本	駒之助			
御台・若君	竹本	越孝			
戸浪	竹本	駒龍			
源蔵	竹本	朝重			

四、新内節明烏夢泡雪（明烏・上）

浄瑠璃	富士松	菊	三味線	新内	勝一朗
			上調子	新内	勝次朗

五、常磐津 薪荷雪間の市川（山姥）

浄瑠璃	常磐津	清勢太夫	三味線	常磐津	文字兵衛
同	常磐津	津太夫	同	常磐津	八百八
同	常磐津	清若太夫	上調子	常磐津	文字蔵

六、長唄二人 椀久

唄	今藤	長之	三味線	今藤	長十郎
同	今藤	尚之	同	今藤	政太郎
同	今藤	佐十郎	同	松永	忠五郎
同	今藤	七郎	同	岡安	喜久次郎
同	高野	長七郎	同	今藤	長之祐
同	高野	展光	同	今藤	長之祐

囃子

小笛	福原	百之助
同	藤舎	信正
同	藤舎	華鳳
同	藤舎	成敏
大鼓	中村	慶

七、箏曲根 曳の松

箏	中能島	欣一
同	吉田	純三
同	島	千華能
同	島	綾能
三絃	市村	綾能

箏	中能島	慶子
同	中能島	弘子
同	中能島	百合能
同	河内	優一
三絃	河内	優一

歌詞と解説 (演奏順)

(解説 竹内道敬)

第一部

一、河東節 恋桜反魂香

河東節は、享保二年(一七一七)に、十寸見(ますみ)河東が語りはじめた浄瑠璃である。三味線音楽の中では、純粹に江戸生れ、江戸育ちである点に特色があり、歌舞伎十八番の「助六」に使われていることから、よく知られている。

男と女が交わらぬ愛を誓ったとき、取り交す物がある。たいてい起請誓紙という場合が多いが、その相手が死んだ後、それを火にくべると、その煙の中から亡霊があらわれて、うらみを述べるという趣向が喜ばれた。浅間ものとか、反魂香ものとかいわれる。この曲はその系統のもので、八百屋お七が吉三郎の絵姿を火にくべると、煙の中から吉三郎があらわれて昔語りになるというもの。宝暦元年(一七五一)二月、江戸中村座で初演された。

お七(佐野川市松)吉三郎(中村余太郎)で、大好評であ

つたと伝える。

春の夜の、夢ばかりなる手枕に、かいたく立ちし嫁が萩、三つ葉四つ葉に殿造り。その吉様の行方をも、きかん便りの封じ文、かの雁金も今ここに、思うもげにや恋の闇。百夜も暮る百千鳥。(中略)

へげに糸遊と諸共に、たなびくうちにあるありと、吉三郎が姿こそ、二上りへ通り廊を遠近の、たつきも知らぬ姿絵を、煙りとすは我を恋う、縁に引かるる車の輪、めぐりめぐりてきさらぎや、着つつなれに恋衣、お七も嬉しき紫の、ゆかりほのめく仲の町、源氏の君を手本にて、薫る大小つかみ差し、振って振り出す道中は、本調子へ外八文字大様に、足は千鳥か鶯の、月日星ぞと鳴く時は、へ四方うらうらとらやまし、よその口舌の手管にも、へ思にきせるの紋日にも、人にあわずの晴嵐とさりしさりし近江屋巴屋の、左と右に行き違う、土手の春色朝景色、羽織を招くきぬぎぬに、

三下りへそなた思うか白波の、舟に筑波を乗せて行くわいな、へそなた思うか白藤小藤、駕籠に浮名を乗せて行く、本調子へうつつに逢うてわりなくも、互に手に手をとり声、横雲白む別れ路に、消えて、へ形は失せにけり、

へお七は興さめここかしこ、草葉に袖のひしぎもの、狂いめぐりしありさまを、皆、慕わぬ者こそなかりけれ。

二、新内節 若木仇名草(蘭蝶)

新内節の代表曲。初世鶴賀若狭掾の作曲で、新内節といえはこの中のクドキへ縁でこそあれ未かけて……が、その代名詞となるほどよく知られている。

市川屋蘭蝶という浮世声色身振師は、榎屋の此糸となじみを重ね、女房のお宮が身を売った金まで入れ上げてしまふ。

お宮は客となつて此糸に逢い、蘭蝶との夫婦の成り立ちを語り、蘭蝶と縁を切ってくれ、別れてくれと頼む。此糸はお宮の真実にくたれ、縁を切ることを約束する。その様子を隣の部屋できいていた蘭蝶は、此糸の本心は死ぬ覚悟であろうと察し、結局、お宮の願いも空しく、二人は心中してしまふ。

全曲を演奏すると一時間以上もかかる大曲なので、その中でもっとも知られているお宮のクドキへ縁でこそあれ……を演奏する。

なお、へああ嬉しやと思つたは……の三味線の手が、いわゆる新内流しの手に応用されている。あわせてきいていただきたい。

へいわねばいとど、せきかかる、胸の涙の、やる方なき、お宮「あの蘭蝶殿との夫婦のなりたち、話せば長い高輪で、一つ内に互いに出居衆」

へ縁でこそあれ、末かけて、約束かため身を固め、世帯かためて落ちついて、ああ嬉しやと思つたは、ほんに一日あらばこそ、へそりや誰れゆえじや、こなさんゆえ、へ馴染みのお客、茶屋衆も、来るたびごとにまた留守かと、愛想つかされのちのちは、へ呼んでくれ手も内証の、詰まり詰まってわたしが身を、売って渡したその金を、またこなさんに入り揚げられ、嬉しかろうか。よからうか、腹が立つやら、口惜しいやら、喰いつきたいほど思つたは、今日まで日には幾度か、その恨みをも打ち捨てて、互いのための心底話。

三、義太夫 天網島時雨炬燵(紙屋内の段)

近松門左衛門の世話物の傑作「心中天網島」は、享保五年

(一七二〇)に初演された。その後、これを土台にいくつか改作が出来たが、話の大筋は変わっていない。安永七年(一七七八)に近松半二らが、「心中紙屋治兵衛」を書き、さらにその一部を増補したのがこの「天網島時雨炬燵」で、くり返し上演されて来た。

紙屋治兵衛は妻子ある身ながら、紀の国屋の小春と馴染みを重ねる。兄の孫右衛門は心配して二人の仲を裂こうとする。一方、治兵衛の妻のおさんは手紙を出し、小春に別れてくれと頼む。小春はわざと愛想づかしをいい、治兵衛と別れる。

それから数日後、小春と別れるという誓紙まで書かされた治兵衛は、炬燵で口惜し涙にくれている。おさんはいやみをいつたりしていたが、小春が太兵衛に身請けされるときいて、小春が死ぬ覚悟であろうと察する。そして小春に手紙を書いたことを打明ける。おさんは衣類やかんざしを質入れし、小春を身請けする金を作ろうとしていたところへ、おさんの父五左衛門がやって来る。そしてその場の様子を見て、おさんを連れて行ってしまふ。

それから今日の場面になる。表にはいつの間にか小春が来ている。死ぬ覚悟をきめた二人の前に、墨染の衣を着た治兵衛の娘お末がやって来る。白衣に書かれた手紙によって、おさんと五左衛門のやさしい心がわかる——という場面。

へ別れと出でて行く。

へしおれしおれし後の影、見送り見送りこかげより、小春はうちへ駆け入れば、へやあそなたはここへどうしてと、尋ねるうちにも幼な子が、母様のうと慕う子を、見るに二人はいとどなほ、思いくすほれ抱きしめ、すかせばすやすや、幼な子を、いぶりながらも口説き言。

へもう何かからいおうぞ治兵衛さん、いつぞやも曾根崎で、愛想尽かしな悲しいお別れ、思い切つてはいるけれど、あの太兵衛に身請けしられては、所詮生きてはいぬ覚悟、この世の名残りにたった一目と、来ごとは来ても折悪しく、立聞きしたうちの様子、もあれほど貞女なおさんさん、おうぎの別れさせますも、みんなわたしから起つたこと、これ堪

忍して下さんせ、堪忍して下さんせえ。へさいのう、真実な入り訳を、きけばきくほどこの身の誤り、もあのような女房が、三千世界にあらうかいのう。このいい訳にはそなたも俺も、へすりやこなさんも覚悟きわめて、ええかたじけのうごさんすと、抱きしめたる泣いじやくり、胸と胸にいわせけり。

へ高砂やこの重箱に餅入れて、片言交り阿呆の三五郎、机にのせし三つ具足、両手にかかえ二人が真中、へさあさあきさようといもんになつたじやないかえ、あのさつきにお家さんのいわんすには、こりや三五郎よ、おれが留守になつたら、大方ここへ小春さんがござんすほどに、そうしたら旦那様と、祝言をさすのじや、われを頼むというておかんしたわいな、そこでおれが思い付き、花瓶の松に鶴亀、酒の取つたがなかつたさかいで、水を銚子に入れて来た媒介役のおれ様じや、札には好きな虎屋饅頭、そして今から阿呆といわんすなえ、よごんすか、よごんすか、さあさあ早う呑まんせ呑まんせ、ああこれ泣かんすないの、泣かんすないの、はあさてはこりや嬉し涙じやの、へおいの、こなさんがいわんす通り、嬉し涙がこぼれたわいのう、さりながら治兵衛さんと祝言しては、どうもおおさんさんへ。へええなんのまあ、すまぬことではござんせぬわいの、お家さんは出しがらになつて、これほどまい鯉節を、お前にやらんすことじやもの、志を無足にせずと、きりきり呑んでござんせいの、ささんせいの。へこりや三五郎のいう通り、祝言じやと思や義理もある、互いに末期の水盃、へさらばお酌を申そうかい。へ涙ながらに取り上ぐる、酒と水とは土器の、土になるまで華札の、一本花や鶴亀の蠟燭立も消ゆる身と思えばいと胸せまる。へさあさあめでとうなつてきた、ええ誰ぞまあ誦うたいが来いでなと見やる外面へ四つ子の、墨の衣に草鞋がけ、へ安養寺尼寺、常念はつち、そりやこそ来たわと阿呆は駆け出で、抱いて入るを顔見てびつくり、へや、お末じやないか、わりや一人戻つたか、そうしてまあ変つた形をしておるな。へあい祖父様にこんな美しいべして貰うた、あんまりこのべは白いによつて、何やらたんと書いて下さつた。この書いたのを、父様や小母様にちやつと見せて来いというて、祖父様が門口まで連れて来て下さつたわいのう。へやあと二人は立寄つて、あたふた脱がす墨染の、下にはなにか白無垢に、おさんが筆の散らし書。

なつたといのう、おさんが尼になつたといのう、おさんが尼になつたといのう。ええ、へ娘さん事はお末もろとも今日尼にいたし、真玉智月と法名付け、天下茶屋尼寺安養寺へ連れ行き、先刻下されし五十両は二人の者の飯料、すなわち寺へ祠堂に上げ申し候。へ皆まで読まず兩人は、わつとばかりに声を上げ、へそりや胴慾なおさんさん、これまで怪気もなされずに、逢わして下さるその御恩、さき入れたのが枷になり、こんなことならその時に、なせそつては下さんせぬ。これなあ申し治兵衛さん、おさんさんを呼び戻し、千年も万年も添いとけて下さんせ、この子は可愛いないかいな。見れば見るほどいたいな、愛にこぼるる幼な子の、乳房に離るるいじらしさ、へ孤児となつたのも皆わしから起つたこと堪忍してとばかりに取り乱したる、詫び涙ことわりせめて哀れなり。

四、箏曲尾上の松

歌詞のはじめは能の「高砂」からとり、それにおめでたい歌詞を加えて御代の万歳を祝した曲。もとの曲は九州系の地歌三絃古曲だったが、宮城道雄が大正八年に箏の手を付けてから知られるようになった。

曲の構成は、前奏―前歌―中歌―後歌―後歌といふもので、手事物の大曲。はじめの手事は「楽三段」ともいわれ、雅楽風な曲で品格が高い。あとの手事は「神楽拍子」ともいわれ、二段の手事とチラシから成る。箏は四上り半雲井調子、三絃は本調子。

〔前奏〕へやらやらめでたや、めでたやと、唄い打ち連れ尉と姥、その名も今に

へええ、涙ながらに一筆しめし参らせ候、さきほど父様連れ立ち帰られ候節、小春様御忍ばせの姿、たしかに見受け候えども、御存知の訳合ひゆえ、御目にもちなり難く、書残し申し上げ参らせ候。へああこれ治兵衛さん、私にもちよつと読ませて下さんせいな。へとかく連合いの命が助けたさ、小春様へわりなきお願い申し上げ候いしに、おきき届け給わる嬉しき、海山にも代えま欲しく、なんぼうかたじけのう存じ上げ参らせ候。ええ、へこの御恩を送り候には、末々お二人を御夫婦となし参らせ候よりほかなくと存じ候。ええ、へその上父様の真実をさき、わが事はこれまでの縁とあきらめ参らせ候、またお末ことはこなたにて育て申すべく候、勘太郎がことを小春様へ、くれぐれも頼み上げ参らせ候。へええこりや何の事じやぞいな、そりやきこえませぬおさんさん、私しやお前にお礼を受ける覚えはない、こりやまあ私をば、術ながらすのかいな、こりや私をば術ながらすのかいな、これいなあ申し治兵衛さん、おさんさんと呼ばば下さんせと、立つて見てい、うろろと、涙にくれいたる。

へ治兵衛またも引き寄せて、ええなにに、男五左衛門申し入れ候、ええなににの男親父の恩知らずめ、うぬが何のろくなことを書きおるもので、へああこれ治兵衛さん、そういわずとちよつと読んで見やしやんせいな。へええ、あた面倒い、ええなにに、男五左衛門申し入れ候、六年以前あたわぬ銀山にかかり、御損失をかけたころ、髯男のゆかりを以て、証文残らず返し下され、千方かたじけなく存じ奉り候。ふん、知れたことじやわいの。ええ、金子の減少本家のきこえを思ひ召し、それゆえの遊所通い、初めの嘘が誠となるは我人若年の時を思ひ出し候、我人若年の時を思ひ出し候。むむ、なるほど、へ先頃娘に右の入訳、委細に承知仕り候ゆえ、軽少ながら金子百五十両、先刻衣裳相改め候節、簞笥の大引出しへ差し入れ置き申し候。おこれ小春、その簞笥の引出しあけて見や、早う、いいやいの、その下の方じやわいの。へおこれ小春、ちよつとこれを見や、へ右金子を以て小春殿を請け出し、おこれ小春、おさんが尼になつたといのう。へええおさんが尼にならっしゃんしたら、わたしやどうしよう。へでもおさんが尼に

高砂の、尾上の松も年古りて、老の波も寄り来るや、木の蔭の落葉かくなるまで、命長らえて、なおいつまでか生きの松、千重に栄えて色深み、琴の音通う松の風、太平楽の調べかな。

〔手事〕へ豊かにすめる日の本の、恵みは四方に照り渡る、神の教えの跡垂れて、尽きじ尽させぬ君が御代、万歳祝う神かくら、みしみんなの前に八乙女の袖振る鈴や振り鼓、太鼓の音も笛の音も、手拍子揃えていさぎよや。

〔手事〕へあら面白やおもしろや、とざさぬ御代に相生の、松の緑みどりも春来れば、今ひとしおに色まさり、深く契りて千歳ふる、松の齡を今日よりは、君にひかれて万代を、春に栄えん君が代は、万々歳と舞い歌う。

五、清元篋花手向橘(吉原雀)

文政七年(一八二四)二月、江戸市村座の「茶の湯景清」の大切所作事として初演された。放鳥売おしず(岩井紫若)、放鳥売七兵衛(七世市川團十郎)の出演で、三升屋三三治作詞、清元齋兵衛作曲、四世市村竹之丞の百年忌追善興行の出し物なので、それを題名にきかしてある。

長唄の「吉原雀」(明和五年十一月初演)を借り、これに筆を加えたもので、前半の二上りの素見ぞめきまでは、長唄そのまま。へ深山の奥……は投節、へそうした黄菊からクドキで、へ苦界する身は新内ガカリ。あと一中節「傾城浅間獄」の鳥尽しをチヨホクレでやって賑やかになる。長唄の曲を利用しながら、清元の旋律を加えているところ。

におもしろさがある。文化文政時代の吉原気分、イキな感覚がよくあらわされている。

「俳優の、昔を今に教え草、吉原雀の故事を、ここに写して三つ扇、たれも三升やつしごと。」

「凡そ生けるを放つこと、人皇四十四代の帝、元正天皇の御宇かとよ、
「養老四年の中の秋、宇佐八幡の託宣にて、諸国にはじまる放生会、
「浮寝の鳥にあらねども、今も悲しき一人住み、小夜の枕に片思い。
「可愛い心と汲みもせで、何じややら憎らしい、その手で深みへ浜千鳥、
「通い馴れたる土手八丁、口八丁に乗せられて、沖の鷗の、二挺立ち、
「三挺立ち、素見ぞめきは椋鳥の、群れつつきつき格子先、叩く水鶏の口まめ鳥に、孔雀ぞめきで目白押し、見世清撞のてんでつとん、さつさ押せおせ。」

「馴れし廓の袖の香に、見ぬようで、見るようで、客は扇の垣根より、
「初心可愛ゆく前渡り、さあさあ、来たぞ来たぞ、来たぞよ、
「さあ来た、また来た、なに、さしがあると、さわりじやないか、
「さしもすさまじいわ、またおさわりか、おいせんしゅう、頼むぜ、
「お腰のものも合点か、それ、からかさそこへ置くぜ、二階座敷は、
「こよう、右か左か、すうつと奥座敷でござります、新造をさまは、
「寝てもさめても忘れぬ、どうぞ二人がこつそりと、深山の奥のその奥の、ぐつとの奥の佗住居、憎いぞえ。」

「そうした黄菊と白菊の、同じ勤めのその中に、きりと呼はるるはかなさは、
「年が明くの待ちかねて、やつぱりしたばと呼ばれたく、男ゆえなら楽しみ、
「苦界する身を立るとて、義理一遍のあだつきは、結句心のもめる種、
「勤めする身も素人も、女子に二つはないわいな、よしてくれよしてくれ、よしてくれよ。」

「吉原雀の雛から飼われて、山雀小雀のくちばしなんぞで、てれんの初音を、
「聞いてもくんねえ、うそ鳥やないとの日文の駒鳥、そこらの目白が見つけてせきれい、
「約束雲雀は昼でもよきり、ちよつと格子へ顔鳥出せとは、
「さりとはいわぬ、鶯のこんな秘密は手管のくだけ、奇妙鳥類鶯の鳥、
「わけも何やらおかしらし。」

をさけるこの兵書、治世に乱の忘れぬため、かの孫康が雪あかり、どりや友人を開いて見ようか。故郷を出でしにまさる涙かな、夢に別れる枕とは、
「げに定家が詠み歌も、身に呉竹の伏見なる、しるべの方を尋ねんと、
「紫竹を出でて後や先、歩み習わぬ道芝の、雪の剣に裳さえ、紅さそう照り草の、
「今ははかなき常盤の前、痛わしや今若と、乙若君を両袖に、
「包めどあまる憂き事の、世を牛若は懐に、凍る乳房を抱き寝の、顔をみるさえいとどなお、
「歩み疲れておわしける、母様危のうござります。必ず怪我して下さるなや、
「オオ今若よういうてたもつた。紫竹の里を出でしより、
「頼りに思うはそなたばかり、思えば昨日は昔にて、鏡が石に影頼み、
「三人の子供は儲けても、御運つたなき源のこの行末、必ず平家の武士に、
「見咎められぬようにしてたもや、とこいうううち伏見へも聞かない。二人とも辛抱して歩いてたもや、
「いえど乙若頑是なく、もう歩くのはいやじや。アアこれはまたどうしたも、今にねんねをさすほどに、
「ききわけて歩くものじや、それ見や、向うが雪あかりで、
「鳥羽の縄手や木幡の里、やがて木幡の山越えて、馬はあれどもかちはだし、
「君を思えば行くぞとよ。歩くものには花紅葉、花の手車手を引いて、
「歩みかかれば雲風に、笠をとられて突く杖の、雪に涙も玉鏢の、
「その道もせ行き悩む。アア夜中といひ、怪しい女、幼な子を多勢連れ、
「この関を越す気であらうが、ここは木幡の関、義朝が残党詮議のため、
「宗清殿のきびしい固め、サアありように名乗って通れ。アア妾はもと都の市人、
「伏見のあたりへしるべあつて、尋ねるうちにこの大雪、
「二人の子供に道はか行かず、思わすも日を暮らしたり、どうぞ情にこの関を、
「アアアそう吐かすほどな怪しい。さあ女めと立ち上れば、ハヤレ待て兩人、
「きけば子供を運れた女と名。源氏の余類に似合の註文、
「身がじきじきに糺してくりよう。何か思案の宗清が、氷る足駄に善悪の、
「邪正の道を踏み分けて、関の扉の庭伝い、賤しからざる上臈の、
「供をも連れずただ一人、見れば幼ない子供を連れ、はてあてやかな。きつと眺めていたりしが、
「こりや女よくきけよ、今四海ようやく穂やかなるも、
「先だつて亡びたる、左馬頭義朝、大勢の子供あつて、
「所々方々に漂泊なし、ことに五条の雑仕常盤が腹には三人の男子ある由、
「生け置いては後日のため、見つけ次第に首打と、新たに建てしこの関所、
「この宗清が眼力に、一目見たれば逃れはない。常盤なり

「げに花ならば桜どき、月なら最中竹村に、その青楼の名にし負う、新吉原という雀、今に噂や残るらん。」

六、常磐津 恩 愛 贖 関 守 (宗 清)

文政十一年(一八二八)十一月江戸市村座初演の「黄之雪源氏最良」の二立目に初演された。配役は宗清(坂東三津五郎)、常磐御前(岩井兼三郎)、奈河本助作詞、三代目常磐津小文字太夫、五代目岸沢式佐ほかの出演であった。

源義朝の没後、その愛人常磐御前が、今若、乙若、牛若の三人の子をつれて諸々をさまよい歩くうち、山城の国木幡の関に来かかる。折からの雪の中、関守の宗清にみとがめられ、子供を助けるために操を破り、清盛にしたがうことになるという、雪中問答の場面。

宗清が主人公で、ちよつと「勸進帳」の富樫のような心持と、常磐御前に対する同情心とはのかな色気が必要とされ、難曲とされている。

なお、この場面が少し陰気だといふので、舞踊会などではこのあと「鞍馬山」をつけ、牛若丸の見た夢の場面にすることが多い。

「君名受けて宗清は、身をかたいとの夜の闇、守れば敵も夜嵐も、矢猛心の矢屏風に、隔てきびしき板扉。降つたる雪かな、野も山も皆白妙と、
「いつか頭に積る雪、寒さに負けぬ宗清が、六波羅よりの上意受け、左馬頭が枝葉の子供、
「見つけ次第に首打と、清盛公のきびしき掟、その制札に、
「松を手折って松を助くと、内府重盛殿の詞を賜うは、何さま心あり気な御説、
「ともかくにも関守は、話相手のないので退屈 睡魔

と白状いたせ。様子問われてふさがる胸。そんなら三人の子供がある故に、
「さあその疑いも子供ゆえ、子のある女はいすくにも。ああいわれなそのいいわけ、
「子供の事はさておいて、いわずと知れた芙蓉のまなざし、
「国色のきこえある常磐御前、外にあらうはずがない、身が引つたてて福原殿へ、
「すりや妾をどうあつても、ほんに思えばこの身の濡れ衣、
「是非もなき世の有様じやなあ。こりや者共、大事の落人関所の庭へ、
「さあ女め、立とう。是非もなくもあらしに、引立てられて常磐御前、
「隙間もあらば遠近の、たつきも知らぬ関の庭、巢を離れたるうぐいすの、
「吹雪に迷う風情なり。へもこつなつては籠中の鳥、逃ぐるるとて逃しはせぬ。
「しかし一人ならず三四人、思えばふびんな事でもあり、
「お幸い、へうしろに立ちし高札の、雪打ち払い文字のあや。コレこれを見よ、
「この高札に松を手折って松を助く、操にかけし詞づめ、
「返事を松の高札に、手折るともまた助くとも、この宗清へ仰せなれど、
「生けてはおけぬ落人の、素性を明かして助かるか、イヤサもし常盤なら手にかける、
「また松ならば助けるとも、思案きわめて返答いたせ。アアそれは、
「さあアア。なるほど妾こそその常盤、
「とても叶わぬこの身の行末、さあいささよう手にかけて、
「およい覚悟、
「観念なせ。抜き放したる氷の刃、
「峯の吹雪に照りさそう、
「光は夜半の月代と、
「見紛ううちにこはいかに、刃物はそれで谷影の、
「岩の間に雪散つたり。アアアそりやみずからを助けんとして、
「松を助くる制札の、
「掟きびしき清盛殿、
「松の操を破れという、謎がとければその松の色かえる松、
「して三人の子供は、
「小枝もともに、
「雪を払うて、
「すぐさまこれより、
「ささ参ろう。いざ御供と宗清に、
「助けられたる幼な子の、
「その源は谷の音、
「峰のこだまとおとずれて、
「南柯の夢と覚めにける。

七、長唄京鹿子娘道成寺

この曲については、今さら書く必要もないほど、よく知られている。能の「道成寺」を基本にして、初演された宝暦三年（一七五三）までの「道成寺もの」の集大成曲である。作曲者として初世杵屋弥三郎の名をあげる人が多いが、むしろ編曲者といった方がいいかもしれない。

とにかくすぐれた作品で、いつきいても楽しいし、何度きいてもあきない。近世三味線音楽の代表曲として、これほど広く知られた曲はない。長唄の代表曲であると同時に、広い意味での日本音楽の代表曲といっていいたいだろう。

誦ガカリへ花の外には松ばかり、花の外には松ばかり、暮れそめて鐘やひびくらん。

三下りへ鐘に恨みは数々ござる、初夜の鐘を撞く時は、諸行無常とひびくなり、後夜の鐘をつく時は、是生滅法とひびくなり、晨鐘のひびきは生滅々已、入相は寂滅為楽とひびくなり、きいておどろく人もなし、我も五障の雲暗れて、真如の月を眺めあかさん。

二上りへいわず語らぬわが心、乱れし髪を乱るるも、つれないはただ移り気な、どうでも男は悪性者、へ桜さくらとうたわれて、いうて袂のわけ二つ、勤めさえたどうかと、どうでも女子は悪性者、へ都育ちは蓮葉な者じゃえ。

へ恋の分里、武士も道具を伏編笠で、張りとき意地の吉原、花の都は歌でやわらぐ、敷島原に、勤めする身は誰と伏見の墨染、煩惱菩提の撞木町より、難波四筋に通い木辻に、禿だから室の早咲、それがほんに色じや、ひいふう三いつ四う、夜露雪の日、下の関路も、ともにこの身を馴染み重ねて、仲は丸山ただ丸かれと、思い染めたが縁じゃえ。

三下りへ梅とさんさん桜は、いずれ兄やら弟やら、わきていわれぬ花の

一、清元忍岡恋曲者（権九郎）

安政五年（一八五七）三月、江戸市村座で「江戸桜清水清玄」が上演された。その二番目狂言が「黒手組の助六」で、当時人気の高かった四世市川小團次にあてはめて河竹黙阿弥が書き下した作品。その序幕に使われた浄瑠璃が、珍らしく吾妻路富士太夫連中の新内節出語り「忍岡恋曲者」だった。

吉原三浦屋の新造白玉を連れ出した近江屋の番頭権九郎は、池の端で、白玉の情夫の牛若伝次に五十両の金を盗られたあげく、不忍の池に突き落されてしまう。この五十両が、まわりまわって、助六が揚巻を身請けの時に使われる。その金には近江屋の極印があったので、助六は盗人の疑いをかけられ捕えられる。助六が浅草観音堂の前まで来た時、白玉と牛若伝次が証人として自首して出たので、助六は許され、権九郎は捕えられる。

その序幕の浄瑠璃は、再演の時から清元に代えられ、今日では清元として伝承されている。巧みな構成で人物の特色もよく出ており、何ともいえない色気もあって、いかにも幕末気分にあふれている。

へ絵に描かば、墨絵のさまやおぼろ夜の、空ににじみし月影も、暗きその身にあとや先、忍ぶ岡を二人連れ、へ散り来る花の白玉に、鐘の音霞む権九郎、手に手を取ってそこはかと、筆を離れし鳥ならで、初音の里もいつしかに、谷中を越えて車坂、よそめに見れば二本の、離れぬ杉も道行は、味な縁しを出雲にて、結び遠えし神垣や、稲荷の森に歩み寄り、権九郎「先ず京なれば木屋町か、当分粋な座敷を借り」

へ下女が一人に子猫が一匹、他には邪魔もあら世帯、取り膳で食う樂しみは、一つ肴をむしり合ひ、箸の先での鍛引き、膳にうつりし景清や、互いに顔を三保の谷に、ひっくり返す皿小鉢、これははたりと飛び退い

色え、へあやめ杜若は、いずれ姉やら妹やら、わきていわれぬな、花の色え、へ西も東も、みんな見にきた花の顔、さよえ、見れば恋を増すえ、さよえ、かわいらしさの花娘。

へ恋の手習いつい見習いて、誰に見しよとて紅鉄漿つきよぞ、みんな主への心中立て、おお嬉し、おお嬉し、末はこうじやにな、そうなるまでは、とんといわずにすまそぞえと、誓紙さえ偽りか、嘘か誠か、どうもならぬほど逢いに来た。へふつつり憐気せまいぞと、たしなんで見ても情なや、女子には何がある、殿御殿御の気が知れぬ、気がしれぬ、悪性な悪性な気がしれぬ、恨みうらみてかこち泣き、露を含みし桜花、さわらは落ちん風情なり。

へさる程にさる程に、寺々の鐘、月落ち烏啼いて霜雷天に、満潮ほどなくこの山寺の、江村の漁火、愁いに対して人々眠れば、よきひまぞと、立ち舞うようにねらい寄って、撞かんとせしが、思えばこの鐘恨めしやとて、竜頭に手をかけ飛ぶよと見えしが、引きかずいてぞ失せにける。

て、それ雑巾よ、拾えよと、さんと呼びやハイと来る、ぶちを呼びや、ニヤアと来る、これも続けて呼ぶならば、おはいおはいといや、おにやあおにやあおのニヤアと鳴く、こんな騒ぎも痴話半分、嬉しかりうじやないかいな、へ鼻毛延ばしてさし覗く、ばかげし顔を流し目に、

白玉「ほんにこりや金でござんすな」

権九郎「しかも小判で五十両」

へ押しただけは後ろより、主は誰とも白浪の、財布めがけて一握み、あわやとおどろく権九郎、池の深みへ突き落され、ぱっと立つたるむらむら鳴。

白玉「伝次さん」

伝次「これ」

へあたり忍んで山吹の、いわぬ色なる濡れた同士、首尾も夜露に寄り添うて、

白玉「今さらいうも愚痴ながら、忘れもせぬ去年の秋」

へまだ新宅の見せ前を、そそるいなせの地廻り衆、多くの中でこなさんが、ふつと目につき物いいかけ、初手は浮気な格子色、いつか浮名も立番や、朋輩衆になぶられて、話しもならず裏茶屋で、見合わず顔もままならず、別れせわしき引けの橋に、涙の雨に離るるが、ここが苦界じやないかいな、へ折しも告ぐる後夜の鐘、伝次は素気なく立ち上り、伝次「ぐずぐずせずと支度をしねえ」

白玉「あい」

へあいと白玉帯しめ直し、身こしらえて行かんとす、こなたの藪のこかげより、

与六「お玉待て」と

へ声かけられ、はつと二人はうちおどろき、

与六「あのここな不孝者めが」

へいわれて白玉たまり得ず、堪忍してと逃げ出だす、袖に弟がすがりつき、姉さん待ってと止められ、行くに行かれぬ憂き思い、へいつつそばにさぐり寄り、憎い子ほどふびんさに、先立つ涙押しぬぐい、へ事をわけたる頼みゆえ、迷う心にとやせんと、二人は目と目見合わせて、なんのいらえも泣く姉に、弟は膝に取り付いて、へよけいな苦勞をさせ申し、もしもの事がある時は、お前もすまず取り付けて、あとに残りし私

が身は、誰を便りにしましよぞ、弟ふびんと思ふなら、親の詞をそむかずに、廓へ帰って下さんせと、涙ながらに手を合わせ、あわれ身に泌む夜風に、今は二人もこれまでと、忍びかねたる不忍の、池も親子が涙にて、水かさまさる如くなり。
白玉「行かねばならぬ浮世の義理」
へ春の名残りにしおしおと、花を見捨てて雁金の、別れともなき別れ霜へせき立てられて是非もなく、二世をかけたる中島も、あとに三橋や清水川、ながれの里へと、別れ行く。

二、宮園桂川恋の柵

宮園節は、もと上方に生れ、幕末ごろから江戸に定着した浄瑠璃である。江戸では、むしろ、園八節といういい方で知られていた。独特な三味線の音色と、哀切な語り口は、永井荷風の小説「雨瀟々」にも描かれている。
この曲は、数少ない宮園節中でも、代表作にあげられるもので、比較的長く、まとまったものである。

お半長右衛門の実説は不明だが、凡そ享保（一七一六―一七五）の頃、京都の桂川に、若い娘と四十男の死骸が流れつき、密通の上の心中とも、強盗に殺されたものだともいわれて評判になった。これが歌舞伎にとり上げられ、ついで明和（一七六四―一七八）の初めごろ宮園に作曲されたもの。義太夫節をはじめ、他の邦楽に見えるお半長右衛門の道行は、すべてこの曲がもとになっている。題材からいっても、ふつうの心中道行が遊女と客の悲恋ものなのに、信濃屋のお半は町家の娘で十四歳、帯屋の長右衛門は三十八歳の分別盛り、年齢も境遇も隔たっているという点も、この心中道行の評判を高くした理由であろう。

三、義太夫寺子屋の段

菅原伝授手習鑑

「菅原伝授手習鑑」は延享三年（一七四六）八月、大阪竹本座初演。竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作。菅原道真の配流から北野天満宮の縁起を大筋とし、それに武部源藏夫婦の苦心、梅王、松王、桜丸の三つ子の兄弟の話などを配した作品で、「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」とともに、浄瑠璃の三大傑作といわれる。

この曲には、三つの親子の別れが書かれているが、この「寺子屋」の段は、松王とその子小太郎の別れを中心にしたもので、作者は並木千柳。

松王の妻千代が小太郎を連れてきて、源藏の妻戸浪との間にやりとりがあり（寺入り）、源藏が丞相の子菅秀才の首をとるように命じられて思案しながら帰る（源藏戻り）、ついで松王が来て、にせ首実をはわが子の首をみる（首実験）、以上の前半の伏線（今日は省略）があつてから、この場面になる。

時間の都合で一部を割愛したが、松王のモドリ（本心をうちあける場面）から、最後の有名な「いろは送り」でわが子の死骸を送るまで、この「寺子屋」は、「菅原伝授手習鑑」の代名詞にも用いられるほど、もつとも多く上演される。親子、夫婦の情愛の深さをこれほど見事に表現した作品は、他にないといつていいほどである。

信濃屋の娘お半は、乳母や丁稚の長吉と伊勢参りの帰り途、隣家の帯屋長右衛門と一語になる。その夜、石部の宿で丁稚の長吉にいい寄られたお半は、長右衛門の部屋に逃げて同衾し、思はず契りを結んでしまう。長右衛門の妻お絹は、お半を自分の弟と縁組させようとする。お半の懐胎を知った長右衛門は、お半を背に桂川へ急ぐ。

二上りへ白玉か、何ぞと人の咎めなば、露と答えて消えなまし。ものを思えば恋衣、それは昔の芥川。本調子へそれはむかしの芥川、へこれは桂の川水に、浮名を流すうたかたに、泡と消えゆく信濃屋の、お半を背に長右衛門、逢う瀬そぐわぬ仇枕、結ぶ帯屋の軒もはや、今宵限りの月影に、流れて連れて行く身にも、妻にも名残り押小路、哀れはあとに遠ざかる、町を離れてようようと、背をおろしてとりどりに、姿つころう心根は、まだ娘気のとやさき、連れて行く身は常よりも、心細道犬の声、あれ壬生寺の鐘の数、九つここに北南、東寺の塔や朱雀野の、火かけかすかに三筋町、身にしむ風に誘われて、（中略）

へおはん涙の露塵ほども、お前の無理じやあるまいけれど、私やいやいな。そんなその様な胸惑な、年もゆかいで恥かしい、これこの帯はどうしようえ。殿御を先へながらえて、身二つになり大胆な、いたずら者じや、悪性な、不心中なと人さんが、笑わんしても大事ないか。そりや可愛いのじやない、憎いのじや。小さい時からお前をまわし、祇園参りや北野さん、物見見物あと追うて、手を引かれたり、負われたり、はだか人形無理いうて、買うて貰うたかんざしも、すかしたらして甘やかし、可愛いがられた親たちより、人が尋ねりや長さんが、たんといとしいうたとき、やがて夫婦にならんしよと、乳母や丁稚になぶられて、何にもいわずうつむいて、恥かしがった下心、他に殿御は持つまいと、思いの種の伊勢詣で。抱かれて寝たりこうなって、遠慮情も先の世で、定まり事とあきらめて、一緒に死んで下さんせ。父さんや母さんの、憎い中にも死んだなら、貞女とやらじや、でかしたと、また賞めらるる事もあろ、ええなあもしと頑足なく、恋をたてぬく輪廻の絆、抱きつく顔と顔、男もところ涙の淵、共に沈まんこなたへと、手に手を鶏の声告げ

へゆられてたち帰る。へ夫婦は門の戸びつしやりしめ、ものをも得いわず青息吐息、五色の息を一時にほつと、吹き出すばかりなり。胸なでおろし源藏は、天を押し地を押し、へハアありがたやかたじけなや、凡人ならぬわが君の御聖徳があらわれて、松王めが眼がかすみ、若君と見定めて帰ったは、天成不思議のなすところ、御寿命は万々年、よろこべ女房。へイヤもうたいていの事じやござんせぬ。あの松王めが目玉へ、菅丞相がはいってござったか、ただし首が黄金仏でなかつたか、似たというても瓦と黄金、宝の華の御運開きと、あんまり嬉しゅうて涙がこぼれる、ハアありがたや尊や。

へと、よろこびいさむ折からに、小太郎母がいきせきと、迎いと見えて門の戸叩き、へ寺入りの子の母でござんす、いまようよう帰りました。へへという声きくよりまたびつくり、へ一つのがれてまた一つ、こりやまあなんとどうしよう。へと、妻が騒げど夫は馴すえ、へこりや、最前いうたはこのこと、若君にはかえられぬ、狼狽者め。へと、戸浪をひきのけ、門の戸ぐわらりと引き開ければ、女は会釈し、へこれはまあ、御師匠様でござりまするか、悪さをお頼み申します、どこにいやるぞ、お邪魔であるに。へと、いうを幸い、へイヤ、奥に子供と遊んでいます。連れ立って帰られよ。へと、真顔でいへば、へおお、そんなら連れて帰りましょう。へと、ずつと通るを後より、ただ一討と切り付くる。女もしれもの、引っぱずし逃げて逃がさぬ源藏が、刃するどに切り付くるを、わが子の文庫ではつしと受け止め、へこれ待った、待たんせ、こりやどうじや。へと、刎ねる刃も用捨なく、また切り付くる文庫は二つ、中よりばらりと経帷子、南無阿弥陀仏の六字の幡、あらわれ出では、へこはいかに、へと、不思議の思いに剣もなまり、進みかねてぞ見えにける。

小太郎が母、涙ながら、へ若君菅秀才のお身代り、お役に立てて下さったか、まだか様子が聞きたい。へと、いうにびつくり、へしてへそれを得心か。へさあ得心なりやこそこの経帷子、六字の幡。へうむ、してそこもとは何人の御内証。へと、尋ねるうちに門口より、へ梅は飛び、桜は枯るる世の中に、何とて松のつれなかるらん、女房よろこべ、倅はお役に立ったぞ。へと聞くよりわつとせき上げて、前後不覚にとり乱す。へやあ、未練者め。へと叱りつけ、ずつと通るは松王丸、見るに夫婦は

て、もはや桂に月の声、あれうしろに火の光、（中略）見付けられじと足早に、こけつまるびつ牛ヶ瀬の、水上へこそ急ぎ行く。

二度びつくり、夢か現か夫婦かと、あきれて言葉もなかりしが、武部源藏威儀を正し、へ一札はまず後のこと、これまで敵と思ひし松王、打つて変つた所存はいかに、いぶかしさよ。へと尋ねれば、へお御不審もつとも、存知の通りわれ／＼兄弟三人は、めいめい別れて奉公、情なやこの松王は、時平公に従ひ、親兄弟とも肉縁切り、御恩を受けたる丞相縁切らんと、作病かまへ暇の願ひ、菅秀才の首見たらば暇やらんと今日役目、よもや貴殿が討ちはせまい、なれども身代りに立つべき一子なくばいかせん。ここぞ恩を報する時と、女房千代といひ合せ、二人が仲の倅をば先へ廻してこの身代り、札の数を改めしも、わが子は来たかと心のめど。菅丞相にはわが性根を見込み給ひ、何とて松のつれなからうぞとの御歌を、松はつれないつれないと、世上の口にかかるくやしき推量あれ源藏殿、倅がなくばいつまでも、人でなしといわれんに、持つべきものは子なるぞや。

へと、いうに女房はなせき上げ、へ草葉のかけで小太郎がきいて、嬉しゅう思ひましよう。持つべきものは子なるとは、あの子がためによい手向け、思えば最前別れたとき、いつにない後追うたを、叱つた時のその悲しき、冥途の旅へ寺入りと、はや虫が知らせたか、隣村へ行くというて、道までいんで見たれども、子を殺さしにおこしておいて、どうまあうちへいなるものぞいな、死に顔なりともい一度見たさに未練と笑うて下さんすな、包みし祝儀はあの子が香典、四十七日の蒸物まで持つて寺入りさすという、悲しいことがこの世にあらうか、育ちも生れも賤しくば殺す心もあるまいに、死ぬる子は媚よし美しゅう生れたが、可愛やその身の不仕合せ、なんの因果に瘡瘡までしつたことじや。へと、せきあげて、かっぱと伏して泣きければ、(中略)へ歎きも洩れて菅秀才、一間のうちより立ち出で給ひ、へわれに代ると知るならば、この悲しみはさすまいに、可哀の者やと御袖を絞り給へば、夫婦ははつと、ともに涙するありがた涙。へついでながら若君様へ御みやげと、松王つ立ち、へ申し付けた用意の乗物、早くはやくと呼はわるにぞ、はつと答えて家来ども、御目通りに昇据ゆる。へはやお出でと戸を開けば菅丞相の御台所、へのう母様か、へわが子かと、御親子不思議の御対面、源藏夫婦横手打ち、へ方々と御行方尋ねしに、いづくにか御座なされし、

えられ、「蘭蝶」(第一部で演奏)とともに新内節の代表曲となつた。通して演奏すると一時間半以上もかかるので、上の「浦里部屋」の一部を演奏する。
春日屋時次郎は山名屋の浦里となじみを重ね、そのための借金で首がまわらない。時次郎は、あがる資格もないのだが、死ぬと覚悟をきめていたので、浦里の部屋に昨夜から居続けしている。時次郎のクドキへそなたもともに……を中心に演奏する。

なおこのあと、時次郎は見つけられ、外へ放り出される。浦里は禿のみどりとともに庭の古木に縛られ、雪責めとなる。時次郎が屋根伝いに来て二人を助けるまで。また後編として「明烏後真夢」が作られている。

(前弾)へ春雨の、眠ればそよと起されて、乱れそめにし浦里は、どうした縁でかの人に、逢うた初手から可愛いさが、身にしみじみと惚れぬいて、こらえ情なきなつかしき、人目の関の夜着の内、明けてくやしき鬢の髪、撫で上げ、撫で上げ、浦里「のう時次郎さん、このようにせきせかれ、さぞ気づまりにござんしよう。それをこらえて下んすも、わたし可愛いと思うてのお志、嬉しゅうござんす、かたじけない」と、へ抱き締めれば、いや俺ゆえと、引き締めて、物をもいわず締め合いて、跡は涙にくれけるが、男涙をはらりと流し、時次郎「いつまでこうしていたとでも、限りもなき二人が仲。長居するほどそなたの身詰まり、このほどだんだん話す通り、国の親父の江戸表、地頭の方へ出だす金、二百両はさておいて、そのほか一門出入り屋敷、かたり尽くしてこのありさま」

へそなたも共にといいたいが、いとしいそなたを手にかけて、どうなるものぞ、永らえてわが亡き跡で一遍の回向を頼む、さらばやと、いい捨て立つを取りついて、あんまりむごい情なや、今宵離れてござんさんの、まめでいさんすその身なら、また逢うことのあらうかと、楽しむことあるべきが、死のうと覚悟さんした身を、いかな気強い女子じやとて、どうして放しやらりようぞ、かねて二人が取り交す、起請誓紙はみんな

へさればされば、北嵯峨の御隠れ家、時平の家来が聞き出し召し捕りに向うときき、それがし山伏の姿となり、危いところ奪ひ取つたり、急ぎ河内の国へ御供なされ、姫君にも御対面、へこりや／＼女房、小太郎が死骸あの乗物へ移し入れ、野辺の送り営まん。

へあいと返事そのうちに、戸浪が心得抱いてくる、死骸を綱代の乗物へ、乗せて夫婦が上着をとれば、哀れやうちより覚悟の用意、下に白無垢麻袴、心を察して源藏夫婦、へ野辺の送りに親の身で子を送る法はなし、われ／＼夫婦が代わらん、へと立ち寄れば、松王丸、へいや／＼これは我が子にあらず、菅秀才の亡骸を御供申す、いずれもは門火門火。へと、門火を頼み頼まるる。

へ御台若君もろともに、しやくり上げたる御涙、冥途の旅へ寺入りの、師匠は弥陀仏釈迦牟尼仏、六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろは書く子をあえなくも、散りぬる命是非もなや、あすの夜たれか添乳せん、らむ愛い目見る親心、剣と死出のやまけ越え、浅き夢見し心地して、あとは門火に酔いもせず、京は故郷と立ち別れ、鳥辺野さして連れ帰る。

四、新内節 明烏 夢泡雪 (明烏・上)

明和六年(一七六九)七月三日、伊之助三芳野の心中事件がおきた。男は浅草の御用商人の養子で二十一歳、女は吉原萬屋の遊女で二十四歳だったと伝える。二人は前の年から馴染みを重ね、金につまり男は勘当、女は他の客を断るといふ始末で借金はふえるばかり、二人は廓を抜け出して心中となつた。

この事件にヒントを得て鶴賀若狭が新内に作曲したのは、安永元年(一七七二)のことと伝える。ニュース性の強いきわものだったが、曲がよく出来ていたので、今日まで語り伝えられている。

仇、合どうで死なんす覚悟なら、三途の川もこれのように、二人手とり諸共と、なぜにいうては下さんせぬ、わしややりはせぬ、放しはせぬ、殺しておいて行かんせと、男の膝にすがり付き、身をふるわして、泣きいたる。

五、常磐津 薪荷雪間の市川 (新山姥)

山姥というのは、山に住む怪物といった意味で、超自然的な存在として考えられていた。これが劇化された最初は能楽の「山姥」で、遊女あがりの女芸人で山姥の山めぐりの曲舞を得意とする百万山姥が、善光寺参りの途中、信州上路の山中で本物の山姥に逢い、山めぐりの舞を見るところ筋になっている。

それを、近松門左衛門は「唄山姥」で、遊女あがりの女芸の家七重桐が、坂田時行の魂を胎内に宿し、信州上路の山中に住み、時行の子怪童丸を生み山姥になっている、という風に改作した。

これが発展して多く頼光四天王の世界の顔見世狂言にとり入れられ、歌舞伎の所作事に多くの作品を生み、重要な系統となつた。それらの曲は、山姥の山めぐりと、怪童丸(のち金時)の荒事が中心であった。これらの多くの作品を集大成したのがこの「新山姥」で、それまでの各流の長所をとってあり、とくに山めぐりのあたりは力を入れて作曲している。常磐津のエッセンスともいえるべき名作で、舞踊にもとりあげられる事が多く、流行している。

へ四面峨々たる足柄山、へ麓に通う椎が本、敵に染める蔦がづら、告命を受けてますらおが、へ曲けたる脇の高枕、げに一瓢の楽しみの、眠りを

さます山嵐。へ山高うして雲行客の跡を埋む。君命うけてこの日頃、かく山賊と様を変え、深山幽谷きらいなく、行きなり次第の気まま酒、眠けざましに、どりゃ一杯やるべいか。へ酒はかりなき盃に、注げば映ろう星の影。

よき藏へあら怪しやな。客星ここにたんだくなし、我が盃中に影さすは、さては一定人傑の、この山中にあるという、天の知らせか何にもせよ、奇異なることを見るものじやなあ。はあこれで読めた、心あたりは山住みの、女が連れるいつもの小僧、どりゃ一服のんで待つべいか。

へ錦の袂引きかえて、木の葉衣を露霜に、染めてあげろの山姥と、人や岩間の若清水、心細道たどたと、杖を力に歩みくる。

よき藏へおおふくろ、今日はまだ逢いませぬの。

山姥へお山賊のよき藏殿、また焚火のご馳走しましたようかいの。

よき藏へそれはかたじけねえ。ときに小僧はどうしましたな。

山姥へさればいの、あとの麓まで連れ立って来ましたが、おおかた猪猿を相手に、相撲がなとってしましうわいな。

よき藏へそれは危ない、早うここへ呼ばつせ、呼ばつせ。

山姥へほんにまあ、おとましい事ではあるぞいのう。

へああおとましいとかこち言、それと見つけて、

よき藏へあれあれ御覧じませ、あのような大きな石をもてあそんで、怪我でもしたらどうしようと思やるぞ、道草も程がある。こりゃ

怪童丸、怪童丸やあい。

怪童丸へおおい。

へ神楽月とて片山里を、笛や太鼓で面白や、足の冷たいに革履買うてたもれ。子をとろ子とろ、どの子が目つき、あの子が目つき、籠目かごめ、かごの中の鳥は、いついつ出やる、夜明のぼんに、つるつるつばいた、木の根笹原くぐりくぐって、ひよいと出たみどり子。

山姥へこれこれ怪童、早うおじやいの。

怪童丸へあい。

へ母を慕うて山道を、尋ね木咲の梅の花よき。

怪童丸へか、おらこんな花折ってきたよ。

へ花うちしようと振りたてて、いたづら盛りのおらしき。

うに、へ誰を待つやら小手招く、へ霞の帯の辛氣らし、しめて手と手の盆踊、へななこの池に移り気の、うらみ過しの梶の葉は、へ露の玉章落ちそめて、へ焦れてぬらす袖の梅、ついでまされて室咲の、へ梅の暦も

いち早く、へ門に松立ちやな、つい誰も出るかと思えばほととぎす、あやめふく間に盆の月、待宵すぎで菊の姿、はや祝い月里神楽、ほんにほんにせわしき浮世も我も、白雪積る山めぐり、山廻り。

三田仕へほほう、この程より心をつけてうかがうところ、さては柔弱非力を悔み、横死を上げし坂田蔵人が妻倅、この山中にこもると

ききしが、もしや二人は、

山姥へいかにも、その坂田の家を興さんと、山神へ祈誓をかけ、すな

わちもうけしこの怪童。

三田仕へさてこそ我が推量にたがわず、時行が妻倅よな。さるにても女に稀なる志、その丹精に山神の加護、倅が勇力さぞあらん。力

の程が、見たいみたい。

怪童丸へおもちれえ、おもちれえ。

山姥へこれこれ怪童、大事のところじや、負けまいぞ。

怪童丸へお合点だ。

へ神変不思議の怪童丸、こなたあしらう勇力士、怪童いらつてかたえなる、松を根こぎに引き抜き、にっこり笑って立ったりしは、人も恐るるばかりなり。

三田仕へ松の根こぎ面白い、さあ打つてこい怪童丸。

怪童丸へ合点だ。

へ打つてかかれれば身をかわし、すかさず剛氣の力こぶ、幹より腕の節く

れて、しつかと掴めばめりめり、へえんや、えんやとねじ合ひしが、中よりやつとねじ切つて、左右へ分れて立ったりしは、めざましかりける次第なり。

三田仕へほう、力の程は見えた見えた、今よりしては頼光公の家臣とな

り、父が家名をそのままに、坂田の金時と名乗らせん。喜べ。

よろこべ。

山姥へはあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田

の金時というさむらいになるのじやが、嬉しいかや。

怪童丸へそんならおれは、さむらいになるのか、嬉しいうれしい。

よき藏へやれ小僧、よく帰って来たな。

山姥へおおう戻つておじやつたのう。さあさいつもの通り、小父様へおじぎじや、お辞儀じや。

怪童丸へお、お辞儀がよく出来ましたな。

山姥へおとなしゅう遊んでおじやつたその褒美に、この間から、あつかの衣織つて着しようと思うてな、山路めぐらぬそのひまに、

五百機立つる窓の内、

へ枝の鶯、糸練り綿練り、織つて着せたる母のほんそ子、里へ下れば、

里の土産は、でんでん太鼓にふり鼓、へうつや空蟬のから衣、千声万声の砧に合はず鼓の拍子、へ面白や。

怪童丸へさあこれからが馬事じや、馬事じや。

よき藏へどれどれ、おれがいろいろを貸してやろう、このまさかりを馬

にしてい。

山姥へ母が囁してやりましよう。

へ月毛にあらぬ斧の駒、へとるや手綱のりりしげに、先のけさきのけ先のける。へお月様いくつ。へ十三七つ。へお供はいくつ。へ八十八つ。

へほんにそりや若いなあ。へ母の胎内蹴破つて、へ産所も産湯も山なれば、取上げお婆に事をかき、産湯の代りに四方の赤、浴せられたかどつ

こもかも、まっかくなつて北嵯峨の、踊りくどきは、へ何というた。

二上りへおらが在所はな、奥山のでてうちの、でんぐりでんぐり、栗の木

の根を枕にござれ、抱いてころび寝。

怪童丸へかかさま、乳のもう。

へ乳のみたいと足ずりは、頑是なき子の習いかや。

山姥へこれはしたり、どうしたも。さあさあこれから、またいつも

の山廻りの話を聞かせましようぞ。

よき藏へなに、山めぐりの話、こいつは面白からうわえ。

山姥へ何のいなあ。

へ昔語りも恥かしい、ありし姿もどこへやら、無明の滝に髪洗い、若葉

を見ては春を知り、妻恋う鹿の音をきいて、秋と思つて深山路を、あしたあしたの山めぐり、へよしあしびきの山廻り。へ四季の眺めも色々に、

二上りへ浮き立つ空の弥生山、桃が笑えば桜がひぞる、柳は風のおうよ

山姥へさりながら、今別ればこの母は、もう逢う事はならぬぞや、

これ怪童丸へおじや。

へ夫の形見と見るにつけ、そなたの大事さ大切さ、今日別れば今宵より、母ひとり寝の闇の内、さぞ面影のなつかしから、頼光公へ御奉公、

つとむるひまのあけくれに、へ武術をはげみ立身せよ、必ずかならず入

横に、へ山姥が子と笑われな。今別るともこの母が、へそなたの影身

につき添うて、なお行末を守るべし。とはいうもののがまあ、へ名

残惜しやいとおしやと、抱き上げ抱きつき、思わずわつと一声が、木魂

にひびき哀れなり。

山姥へかくては果てじ怪童丸、お頼み申すは仕さま、名残は尽きじは

やおさらば。

へ暇申して帰る山の、へ峰も梢も白妙は、源氏の栄え尽きしなき、守る

神垣は妄執の、雲の塵積もつて山姥となれり。山また山に山めぐりして、

行方も知れずなりにけり。へかかる所へ猪熊入道、手勢ひきつれ馳せ米

り、怪童丸を見るよりも、

猪熊入道へ正盛公の上意をうけ、汝を味方にかかえんと、出かけて見れば、

三田仕へしれた事だ。怪童丸はたつた今、頼光公へ推挙したわ。奉公は

じめにこいつらを、引くくつて君へのお土産、怪童ぬかるな。

怪童丸へさあ弱虫めら、みんな一度に、こいこい。

猪熊入道へなにもございな、者どもそれ。

へやらぬと組み付く手の者を、一度につかんでつぶて投げ、かつ色見する金時

が、真先かける冬至梅、一陽開く智男の花、歌舞伎の栄えそめてたけれ。

六、長唄 其面影 二人椀久 (二人椀久)

大坂界筋の豪商椀屋久右衛門が、新町の傾城松山と契り、豪遊の果て、座敷半に入れられ、ついに発狂して死んだとい

